

及川平治の幼稚園保育

(二)

久保いと



大正初期の明石附属幼稚園は、ひきつづき『保育方針並ニ幼稚園内規』にそつて運営されていたものと考えられます。そこ

では幼稚園教育の目的を、「附属幼稚園ハ幼児ヲ保育シ本校生徒ニ実地保育ノ練習ヲナサシメ兼テ家庭教育ノ欠点ヲ補フモノトス」(明石女子師範学校附属幼稚園規定第一条、明治四十二年)とおさえ、この目的のもとに「保育ノ方針」を「(一)幼児ヲシテ健全ナル身体ノ發育ヲ遂ゲシムルコト (二)幼児ノ心情ヲ涵養シ且ツ善良ナル習慣ヲ得シムルコト (三)以上ノ目的ヲ充分ニ達セシメ心身ノ完全ナル發達ヲ計リ以テ家庭教育ヲ補ヒ併セテ完全ナル学校教育ヲ受クルニ適當ナラシメントス」と三項目にまとめてありました。現実の幼稚園生活は、保育事項——会集・園芸・旅行・遊嬉・談話・手技・唱歌・觀察・整理——と、生活に由る保育——服装・食事——の細目にわかれて指導され

ていました。

このように項目別の骨組だけをかかげますと、なんだか味気ない幼稚園生活だったかのように想像されますが、実際はそうではありません。そのことは『保育日誌』によつて十分に証明されています。子どもたちが実に明るくのびのびと、しかも保育の細心な配慮をうけて生活しているのです。子どもにとつてはたのしく、教師にとつては意義のある幼稚園生活を準備するための努力がなされていたのです。保育内容の選択にさいしては、つねに子どもの心理的身体的条件を尊重し、教育のねらいと内容・方法を検討し、さらに環境的条件を加味して、選ばれ実施されています。そのような論理的問いつめの周到さと、内容・方法の一貫性とは、そのころの幼稚園教育の理論と実践にとつて、他に類例のないものであったと思われま

そのころの幼稚園は、一般に初期らしいフレーベルの方法がしだいにくずれ、明治三十二年の『幼稚園保育及設備規定』のあとは、保育四項目がほぼ踏襲されている状況でした。初等教育界では、明治三十八、九年ごろより谷本富の新教育が論争をよびおこしていましたが、保育界では、明治三十四年らしい東基吉が雑誌『婦人と子ども』をとおして、フレーベル的幼稚園を改革するようによびかけてはいたものの、現実には東クメらの創作的な幼稚園唱歌による技術的改革が進行していたにすぎず、幼稚園教育理論にたいする根本的な問いつめが必要であったにもかかわらず、いまだ試みの段階にすぎなかったのです。そうした一般的状況を考えあわせると、明治後期における及川平治の幼稚園保育理論とその実践は、既存の幼稚園教育への批判と、新しい幼稚園理論の追究をねらいとした一種の幼稚園文化革命であった、といえるかもしれません。

動的教育論について

明治期において「為さしむる主義による教育」を数年間実践した結果、及川平治は、大正元年に『分団式動的教育法』を、大正四年に『分団式各科動的教育法』を出版しました。これらの書物は全国の教育関係者にひろくよまれて、明石附属小学校は、大正期新教育運動の先駆的実践校として、全国から参観者

をあつめるようになりました。動的教育論の確立とあいまって幼稚園教育理論も、いままでのやや試論的な手さぐりの段階から、さらにすんだ理論的確立と、それにそった充実した実践へと、自信をもって前進してゆくようになります。そこで、幼稚園教育にはいるまえに、及川平治の動的教育論の核心について、すこし述べておきましょう。

動的教育論とは、二十世紀初頭のアメリカで展開された進歩的教育運動のながれに位置する新教育運動です。その中核は、デューイ教育学でした。デューイの教育思想は、ふるくさかのぼれば、ルソー、ベスタロッチ、フレーベルなどのながれにむすびついています。ルソーは、その著『エミール』で、いままでの旧き教育が子どもを机にしばりつけ教科書をあてがって、いつくるかわからない遠い未来のために、ABCやその他の知識を注的に教えこんだことに反対して、子どもの現実の生活の必要からおこってくる学習の動機を重んじ、子どもの興味や関心を尊重しつつ、日常生活の経験のなかで、ダイナミックな活動をとおして学習すべきことを主張しました。動的教育論の大綱は、この精神に依拠しているのです。

及川平治の努力は、従来の静的教育をあらためて動的機能的教育にすること、子どもがわの事情を重んずること、真理そのものをあたえるよりも真理の探究法を授けること、を主張し

ました。及川平治は、従来のヘルバルト派教育学の教材論とはちがった学習材料論——題材論を構築します。児童中心の立場にたつて、子どもの衝動を手がかりとしながら、それに水路をつけ、規正善導しつつ教育の理想に近づけようとしています。既成の教材を教えるのではなく、子どもの直接経験や作業をおとし、為すことによつて学ばせるのです。

動的教育は、必然的に分団式(グループ)教育法をどらざるをえなくなり、分団式教育法というものは、子どもの能力に応じて題材にとりくむそれぞれの地位に子どもをおき、能力に応じてそれぞれ努力させ、補導することを意味します。ここでは、画一的な教師中心の知的注入主義を否定して、子どもは必要に応じて小さいグループをつくり、それぞれの能力に応じて創意を發しながら、自力構造——自学するのです。

さきほどあげた二冊の書物には、分団式動的教育の理論と實際の指導が、くわしく論理的に展開されています。それまでのわが国の新教育が、谷本富による思想の紹介にすぎませんでしたから、明石附属の實踐によつてうらづけされた動的教育論は身近な新教育として熱狂的にうけいられ、大正期新教育運動の火つけ役となつたのでした。

科学化への努力

大正期における及川平治は、保育目的としてかかげた三か条については従来どおりの考え方をしていますが、しかし、保育内容や方法の理論的根拠をあきらかにするために、できるかぎり科学的方法をとりいれようと努力しています。科学性への探究はすでに初期のころからも試みられていたもので、これは、及川平治の実証主義的な思考方法の特徴をなしています。さきの『保育方針並ニ幼稚園内規』も、總体的にはひとつひとつの事業認識のうえにたつて、ちみつに論理構成されながら書きすめられています。具体的な事例としては「保育ノ効果測定」という項のなかで、くわしい身体検査と個性調査の實施、そしてその結果を保育にいかを利用してゆくかについて指示しています。ひとりひとりの子どもに個性觀察簿を用意し、その特徴を記入するようにすすめており、そのさいに記入のしかたがまぢまぢにならないように、身体・動作・性質・言語・好み・習癖にわたつて、「個性觀察簿記入標準」まで用意されています。

大正期になつてつくられた『幼稚園経営』によれば、科学性への探究はさらに前進し、幼稚園教育の第一目標である「心身ノ健全ナル發達」のためには「保健カリキュラムスケール」をつくつて實施し、第二目標「善良ナル性情ノ涵養」には「習慣態度ノカリキュラムスケール」を、第三目標「家庭教育ノ補充」

児童ノ氣質ト玩具

のためには「家庭状況調査」を考案しています。その他、幼児の知能検査・身体検査はもとより、衛生的習慣の測定・習慣態度の測定もおこなわれ、郷土の実情調査とあいまって、これらを含めカリキュラム作成と指導に生かす努力がなされています。

保育効果の測定としては、観察法が用いられます。『幼稚園経営』にはつぎのように記されています。

「測定トシテノ観察ニハ

1、カリキュラム資料蒐集観察

2、教育効果ヲ測定スル観察トアリ

ココニハ測定トシテノ観察ヲ意味ス

観察ハ唯見ルコトニアツテ、科学的観察ハ教育測定学ノ示ス

トコロニ従フベシ

幼児ノ行為ハ三品等ニヨル

測定の結果ハ別ニ定ムルトコロノ幼児ノ生活記録ニ記入スベシ

生活記録ノ形式記入法ハ別紙ノ通りトス

このようにして、できるだけ科学的な方法によって子どもを観察してその氣質を理解し、それによつて教育の要点と、もっとも適当なあそびがくふうされて、つぎのような表が試作されました。

氣質	教育ノ要点	玩具
一、興味を刺激する事	二、克己力を養ふ事	秘密箱 くらべ姿 自動船乗人形 子持アルマ
三、進取の念及び実行力を養ふ事	三、進取の念及び実行力を養ふ事	二人くらべ チエノワ 数並 竹カエシ お手玉 輪投 チエクラベ
◎与ふべき玩具	一、好奇心を養ふ事	農具 空気銃 軍艦 コマ
二、克己力を養ふ事	二、克己力を養ふ事	源平打球 軍隊道具 凧 羽子の付弓矢 桶のた が細トビ
三、進取の念及び実行力を養ふ事	三、進取の念及び実行力を養ふ事	児童撃剣用具 オハジキ 剣 玉 マリ
四、活発なる運動を要するもの	四、活発なる運動を要するもの	とんでこい 竹とんぼ 源平 打球 ボール等

「新シキ玩具ヲ研究シテ変更スベシ」とかいてあるところをみると、この表はおそらくひとつの例として作られたものでしよう。同様の形式で、軽はずみな子供、忍耐力に乏しき子供、物事に感心せざる子供、強情なる子供、思いやりの心なき子供、考ふる習慣なき子供、についても教育の要点と玩具があげられているのです。

生活と学習の統合への努力

この時期における及川平治のもうひとつの努力は、生活と学習の統合のあり方をいっそう徹底的に追究することにあります。彼は「生活」というものを分析して「生活指導」という概念をみちびき出し、生活指導と保育の様式とは一致すべきものと考えようになります。しかしながら、つぎの引用でもあきらかなように、まだ統合は果たされておらず、カリキュラムは(1)保育項目に分離せざる生活単位案と、(2)保育項目別単位案との二つを作成すべし、とかがれているのです。

「幼児が要求興味ヲ充サムトスル継続活動ヲ幼児ノ生活ト云フ

幼児ノ必要興味ヲ充タスコトニ関スルアラユル事情ヲ生活地位ト云フ

生活地位ニ於テ活動ヲ組織シタルモノヲ生活様式又ハ生活姿態ト云フ

社会ノ生活様式ハ歴史的ニ構成セラル

生活指導ハ必要興味ヲ価値アル方向ニ導クコト、生活様式ノ

変化ヲ悟ラシムルコトヲ意味ス

生活指導ト保育ノ様式トハ一致スベキモノトス

幼児ノ生活系列・経験系列ヲカリキュラムト云フ

カリキュラムニハ、(1)保育項目に分離セザル生活単位案ト(2)保育項目別単位案トノ二ツヲ作成スベシ
各カリキュラムニハ、幼児ノ代表的活動ト望マシキ思想・感情・行為ノ変化トヲ記載スベシ
そして、たとえば昼食について、カリキュラムの例があげられています。

代表的活動	昼食	
	望マシキ行動へノ変化	食
(1) 手ヲ洗フコト	水道ノ出口ヲ適度ニアケテ洗フコト 水ガ飛散セヌヤウニ洗フコト 洗ヒタル後ハキレイニハンカチデ拭フコト	
(2) 食事ノ準備ヲ成スコト	麦茶ヲ配ルマデ順番ヲ静ニ待ツコト 挨拶スルコト	
(3) 食物ヲ食スルコト	適当ニ食スルコト 小口ニトルコト ヨクカムコト 飯粒ヲコボサヌヤウニ食フコト 口ニ食物ヲ入レテ話ヲセスコト 他人ノ嚙ミ居ル間ハ話シカケヌコト	

(4) 食後ノ仕末

清潔ニスル責任

食器ヲ片付ケルコト

パン屑ヤ飯粒ヲ拾ヒトルコト

コボレタ水ハ拭ヒ去ルコト

面白ク話ヲスルコト

一時ニ一事ヲ話スコト

子供ニ適スル食物ノ種類ヲ学ブコト等

(5) 食後ノ会話

このように、ひとつの指導案ごとに指導目標がはっきりわかるように、のぞましい行動への変化が具体的にあげられています。

「生活指導ノカリキュラム生活単位案」の作成は、単位選択の基準にもとづいて単位をえらび、これを単位組織の原理によつて組織します。そうしたカリキュラム構成は、カリキュラム構成学の示す順序にしたがって合理的につくられるのです。このような手づきでみちびきだされた生活単位として、つぎのような例があげられています。

- 「買物ゴッコ 自動車遊(電車遊) 汽車遊 飛行機 郵便
- ゴッコ 電信遊 八百屋遊 玩具屋遊 文房具屋 菓子屋
- 人形遊 ママゴト 農夫遊 家作り 誕生日祝 水遊 祝祭
- 日 正月遊 消防遊 巡査ゴッコ オ雛祭 端午節句 七夕

祭 オ月見 家族ノ食事遊 家族娛樂 衛生的事項ノ劇化

蒐集遊(木実・木葉・貝殻・石塊) 近郊見学 神社参拝

園芸(細案ヲ要ス) 公園(細案ヲ要ス)」

このように活動的な生活単位が計画されたほかに、保育項目別単位案も計画されていました。その例をあげておきましょう。

『園芸及動物飼育ノカリキュラム』

亀 金魚 鮒 鯉 小鳥

四月 朝顔ノ種蒔(児童ノ活動:望マシキ活動ヘノ変化)

五月 コスモスノ種蒔()

六月 田植(種蒔) ()

菊ノ移植 朝顔ノ手入れ 養蚕 オ玉ジャクシ

七月 朝顔ノ手入れ 絹糸草 金魚 メダカ 箱庭

九月 大根蒔 園庭ノ手入れ キリギリス 藤豆トリ コ

ホログ

十月 菊ノ手入れ 春咲ノ花ノ種蒔 木ノ実拾(ドング

リ)

十一月 米ノ収穫 菊ノ手入れ 麦蒔

十二月 豌豆蒔 園庭ノ手入れ

一月 畠ノ手入れ

二月 麦ノ手入レ

三月 種時草花ノ種時 ハゲイトウ コスモス カンナ

『近郊利用ノカリキュラム』

詳細ナルカリキュラムヲ別ニ作成スベシ

公園内ノ設備

設備ノ正シキ利用

公園 動物ノ觀察

樹木草花ノ四季ノ変化 菊花展覧会

公園内ノ池

潮ノ満干 船舶ノ航行 港ノ觀察

海岸及遊園地

夏季海水浴 売店ト季節ノ変化

忠魂碑 設備利用

生魚池 魚類 海草

神社 売店 花見

人丸山ノ方面

丘陵 坂路 月照寺

境内ノ設備

権現山ノ方面

山ト平地 田畑

草狩

上ノ丸方面

田園ノ植物 農家ノ生活

牧場 蓐狩

重ナル建物 道路 鉄道 電車通

市内見学 停車場 停留場 神社参拝

各種工場 商店裝飾 商店種類

舞子方面 徒歩ノ心得 公園ノ設備

動物園 花見

須磨方面 汽車旅行ノ心得

離宮 寺 売店

望海浜方面 運動・遊戯ノ場所

農事試験場方面 試作ノ植物

水産試験場方面 各種ノ試験・水産物ノ加工過程

これらはいずれも年間の活動の骨子だけしかあげていませんから、これをもとにして、もっとくわしい計画がつくられていくのです。そして、一日のプログラムはおよそつぎのようになります。

『一日ノプログラム』

一、集会

1、朝礼 朝ノウタ

2、見聞事項ノ自由発表

3、偶発事項ノ指導

4、相互ノ注意

ハンカチヲ忘レナイカ

鼻紙ヲ忘レナイカ

月謝を忘レナイカ（毎月五日）

5、保母ノ話 其ノ日ノ注意

6、行進遊戯

二、其ノ日ノ保育カリキュラム

1、其ノ日ノ保育事項ハ環境ト児童ノ興味トニ由テ決定ス

2、雨天時ノプログラムト晴天時ノプログラムトヲ區別シ

テ立案スルコト

三、遊戯室開誘室廊下園庭ノ整理

いままで、資料を追って、明石附属幼稚園における大正期の保育を概観してきました。この時期の保育は、初期のそれと制度的にはほぼ同じ規定のもとに保育方針と保育項目（『幼稚園経営』では保育項目ということばがつかわれています）をかかげ、カリキュラムは、(1)保育項目ニ分離セザル生活単位数案と、(2)保育項目別生活単位数との二つにわかれているのですが、保育実践の具体的内容からみると、いわゆる保育四項目の影がきわめてうすくなっていることに気付きます。保育項目別カリキュラムにおいてとくに顧慮されているのは、「園芸及飼育ノカ

リキュラム、近郊利用ノカリキュラム、設備ヲ利用シタルカリキュラム」です。保育実践にうつしたばあいを想定しますと、

これらのカリキュラムは、生活単位数のものになってしまいうように考えられます。実践上では、すでに、保育項目のうちの多くが、より大きい概念としての生活単位数に吸収されつつある事実がみうけられます。いわば、制度としての細分化された保育項目と、総合化された保育実践とのあいだに、矛盾がめだちはじめます。保育実践が総合化したのなら、細分化された制度は実情にあわなないものでしかありません。古き皮袋は、改められなければなりません。制度としての細分化された保育項目を理論的に改変して、統合化された保育実践にマッチさせる必要がおこってきています。このような理由から、やがてもう一歩前進した立場から、指導理論が改革されていきます。これについては、つぎにふれようと思います。

この時期の及川平治は、動的教育学の理論の確立とあいまって、明治後期からつみあげてきた幼稚園保育を、さらに理論的・実践的に充実させました。保育の科学化への努力、生活と学習の統合への努力、そして後者における実践上の飛躍は、いまやさらに新しい理論を必要とするにいたりました。その新しい理論をつくりあげる努力を、及川平治はさらにすすめていくのです。

（和光大学）